# 戰爭の地理學的考察（四）

小川琢治

## 一〇

茲に述べ來つて戰略學の要領を綜括する爲めに、作戰及び操兵線に關する格言ともいふべき事項に就き尙ほ數言する。

第一作戰の方向は根據地との直接交通が危くなくて、必要あらば此の線の方向を變じて脅威された根據地と連絡する側に移動し得るものたるを要する。從つて此の如き都合好き方向を選擇するに當り、根據地、戰域內部及び鐵道網の地理的關係が大に影響することは勿論で、今日では作戰幹線は鐵道の幹線に遠かることが出來ない。

第二此の點を考慮すれば敵軍を分裂するのが作戰線選擇に於ける眼目となり、作戰線は中央に向けるか兩翼の一端に向けるべきで、兵力の優勢で士氣の旺盛でない時に中央と側翼とに同時に向ふのは此上もない誤謬である。

即ち敵の正面が過長ならば中央に對すべく、然らざれば一翼に對すべきで、此の如く行動すれば他の翼を粉碎せんとする如く脅かしつゝ、敵軍兵力の一部分のみに衝突することになる。

普佛戰爭の初期に於ける獨軍の佛軍に對する攻擊はスピケレン及びフォールバッハの近傍にてその

正面を攻擊し、キッセンブルグ、エルトにてマクマオン軍に對して殺到し、その右翼に兵力を集中して之を擊破したのである。その後の遭遇戰にても常に同樣の操兵を試みて成功した。獨軍の兵力が最初から佛軍に對して優勢であつたのは勿論で、後には同數又は劣勢でも精神的に優越してゐたことは勿論なるも、この作戰の方針により成功した譯である。

第三は互に獨立した二軍を編成することを避け、成べく單一線による作戰を行ふことで、對抗する兩軍の兵力が略ぼ同數なる時には特に必要である。

第四は地勢上又は敵軍の二線を取る爲めに之に對應して二重線上の作戰を要する場合には、內線を選み、敵軍の兩集合點に對して適當なる兵力の集合を容易にする方針を執るべきである。

此の如き場合に兩內線が互に餘り隔たらぬ樣になり、又た餘りに狹隘なる處に密集することも避けねばならぬ。ライプチヒに於けるナポレオンの場合には此の過失により危地に陷つた。

第五に二重線は成べく先で相合する樣になつてゐるがよく、且つ敵軍がその一線に在る作戰集團に對して全兵力を以つて打破を試み得ぬ樣に按排せねばならぬ。

第六は經濟的及び政治的事情で、是れも亦た作戰の決定上に重大なる影響を及ぼすものである。作戰地で物資に豐富であるか貧乏であるか、自國內であるか他國であるかにより考慮すべき所頗る多く、特に他國に於いてはその住民が敵意を抱くか、無關心なるか好意を有するかがその決定に非常に重大なる關係を生ずる。

日本軍の作戰は屢朝鮮半島に於いて行はれ、文祿役には朝鮮を敵として之を後援する明軍と戰ひ

日清日露兩戰役にはその援助を受けなんだまでも反抗し若くは兵站線を脅かす樣な危險を感ずることの無かつたのと著しい相異が認められる。

第七は戰役中に作戰線を變更することで、是は頗る微妙にして危險の多い作業には違いないが、適當なる時期に十分の注意を加へて行へば好結果が獲られる。

一八〇五年ナポレオンは若しアウステルリッツで敗れたらば、維也納よりもボヘミアを横つて兩敵對軍の未だ通過せぬバサウ、レーゲンスブルグを經てダニューブ河上に退却する積でゐた。關原戰役の時に西軍に屬した島津の一隊だけ正面を突破して南に折れて伊勢路に向つたのは同じく巧妙な行動で無事に退却することを得たのはこの臨機の決心の遂行によつつたのである。

## 二

兩敵對軍正面の位置の關係が戰略的作戰の進行とその結果に對して重大なる影響のあることは既に述べた通りである。尙ほ茲に兩軍の根據地即ち攻擊軍の防禦軍の防禦線との相互關係から生ずる影響に就いても一言せねばならぬ。

一方の根據地が他方のそれに對する關係は平行、斜行、斜行と同時に平行、又は包圍か被包圍の位置を成し得る。作戰、根據地及び防禦線の正面は同一であり得ることは茲に述べた所から容易に了解され、從つて正面に就いて言つた所は平行及び斜行正面に就いて同じく言ひ得る。即ち根據地の互に平行する場合には兩軍の位置の關係から生ずる利不利略ぼ均等で、攻勢は正面に於ける行動による外なく、迂回運動は危險である。然れども地形の狀況が特殊の手段か又は他の都合のよい事

情かがあれば敵軍の行動を掣肘して强力なる集團を左右兩翼の中の一端に集めて此の如き運動を試むることが可能となる。

一八七〇年戰役に於ける普軍根據地はライン河のカールスルーへの對岸に當る支流ラウテル河の北から起つてモーゼル河下流までに延長し、アルサス、ブヮージュに亙る佛軍の第一防禦線に對して斜行してゐた。

伊太利半島の地勢からいへばポー河とアペナイン山脈とは互に斜行の方向を有するから、アペナインに據るトスカナ側の防禦軍に對する北方からの作戰はその側面を暴露する不利があり、その交通線が脅かされる。

同時に斜行と平行とを兼ねた根據地は二重の根據地であつて、戰略上の組合せ方を種々にすることが出來て、攻擊軍は一方を牽掣しつゝ他方から側面に集團を以つて突擊する便利がある。一八〇〇年佛軍は防禦第一線として黑森に據つた墺軍に對して瑞西、アルサスの兩方から作戰を行ひ得、陽動によりアルサスの方に敵軍の注意を牽き付けて置いて、突然右翼の端から進出した。

若し兩根據地が折線を成す場合には兩側は互に平行して、一方が包圍する形を成せば他方は包圍される形を成し、後者は內線作戰の利益を有すると同時に、敵軍の根據地により生じた面の一に對して作戰を試むるに當り、他の一面に對して一側面を暴露する不利をも感せざるを得ぬ。

之を要するに包圍根據地は單一根據地に對して二重根據地の有する凡ての利益を必しも有せぬまでも、二重根據地を有する軍の操兵の場合に類似する行動の自由がある譯である。

作戰計畫(案) Plan of operation といふ語が屢〻用ゐられる。此の用語の意味は普國デッケル將軍の定義した如く作戰又は戰役計畫(案)なるものは一戰役を通じての作戰全部の豫定計畫にして、その戰爭の攻勢的なるか守勢的なるかに從ひ攻勢又は守勢に區別される。然れども箇々の作戰は全く攻勢若くは守勢たり得ぬは勿論で、敵軍の出方により攻擊の代りに防禦に滿足せざるを得ぬこともあり、又た防禦は攻擊の要素なしに必しも有効でないのである。故に一計畫に此の攻守兩意義が共に含まれてゐべきであるが、原則として採用された攻守何れかの一方が最も重大なる發展をなすかによつて決せられる。

作戰計畫は又た將軍のこれによれば定めた目的を達し得ると信ずる所の行動の列擧であるともいひ得る。ナポレオンが作戰計畫に就いて言つた如く、戰爭に當り打算なしに何ものをも獲難く、詳細に涉り深慮を運らすに非ざれば何の結果も擧らぬ、遠征に當つては先づ一定の計畫を立つるを要し僥倖は何の價値もないのである。

尤も野戰の計畫なるものは箇々の鬪爭の過程を全部定めるものでなく、前以つて決定した通りに凡てを几帳面に遂行するといふことに拘泥してはならぬのは言ふまでもない。一大戰が行はれた後に物資的にも精神的にも廣大深刻なる結果が生じ、形勢が一變して新らしい地盤が出來又た新らしい配置を爲し得ることになる。戰略的豫定計畫は敵軍の主力と初めて衝突する瞬間までに生じ得る出來事だけを見越すといふ以上に出でない。それから先は此の衝突の結果次第で進退の掛引が種々に變化するのである。

作戰案と戰爭の計畫とを混同してはならぬ。後者は政治上の事情を考慮し海陸兵力全體を打算して建てるもので前者は政治上の事情に左右されることはあつても、直接には主として戰略學の範圍に屬し、戰局に於ける作戰に限り適用されるものである。

野戰計畫は將さに始らんとする鬪爭が起し得る種々の假定に對して應答するを要し、國境の特殊の地勢や我が軍及び敵軍の作戰地域から離れて、兩國の用ゐ得る兵力、特殊の事情、軍資及び交通機の關係から生ずる假定し得る問題は種々あらうといふもので、此等に對應して建てられねばならぬ。戰略上の組合せ方により此等の箇々の假定により豫期される偶發的事件は對抗し得る譯で、從つて此の計畫は將軍の實際の行動に當り所定の目的を達する爲めに執る所の攻守の作戰體系と全く同じものに外ならぬ。

以上述べた所を概括すれば野戰計畫は戰略上から立案された目的の遂行に必要なる作戰案の全部を含み、最初の主力の衝突によつて作戰案の豫定の目標に達した後に更に第二第三の目標に向ひ進んで戰爭を起した趣旨の貫徹を期するのである。日清日露兩戰役に於ける戰域は同一で、作戰の目標も何時も奉天であつたが、二回共に彼の衝突は海陸兩面に於て起ることが豫期され、陸軍は先づ朝鮮半島に入り込んだ敵軍を驅逐して兩國の朝鮮半島に對する政治上の要求を排斥し、此の目的を達した上で鴨綠江を越えて滿洲に進出し、海軍は朝鮮西岸に對する敵艦隊の脅威を除き、尙ほ進んで遼東半島の南岸に對する我が陸軍の海上輸送を掩護して滿洲に於ける戰爭の正面を廣くするに在つた黃海に於ける二回の海戰は何れも敵艦隊を閉息せしめて此の目的を實現し、戰役の第二期卽ち

本舞臺に入り、陸戰は安東縣から旅順に至る一線を成した正面を現出し、日露戰役に在つてはこの正面と旅順及び大連港と奉天とを連結した南滿洲鐵道に對して斜行する位置を占め、第二軍の得利寺遭遇戰に捷つたので旅順大連と露軍主力との交通線を遮斷し、一軍は旅順要塞を陷れ、三軍を以つてその主力に當ることになつた。その正面は安東縣から鳳凰城に進出した第二軍と連絡して太子河に沿ふた露軍の正面と斜行し、我が左翼に於ける戰鬪の捷利と共に正面の位置は回轉し、遼陽、沙河奉天の三戰により奉天占領の目的を達したのである。

# 濟州島遊記（一）

原口九萬

濟州島は火山現象の諸相を吾々に容易く且つ明確に理解さして吳れる生きた教科書であつて火山學上世界に誇るに足る寶庫である。私は此の火山島の調査を昨年から始め、その結果は度々本誌上で豫報したが今春同島へ再遊する機會を得て、殆ど全島に亘つて鐵槌の跡を印することが出來た。今此處に兩度の旅行によつて學び得た火山學上の見聞や感想を筆にして讀者の判讀を冀ふ次第である。

## 一、形態的に見たる濟州火山

濟州島は全羅南道と長崎縣の中間、東經自一二六度九分至一二六度五八分北緯自三三度三四分至三三度一〇分に横はる一大島嶼と十三の屬島から成り、その全面積は百二十方里に達し、我が壹岐、對馬、隱岐、佐渡の諸島を合